

## 鳥のアーキテクチャ ——手を使わずに構造物を作る

日時：2014年10月19日(日) 13:30-15:00

講師：松原始（総合研究博物館特任助教／動物行動学）

### 建築博物教室レポート

第4回となる今回は、動物行動学を専門とする総合研究博物館特任助教の松原始先生により行われた。そのテーマは、「鳥のアーキテクチャー手を使わずに構造物を作る」であった。以下では、講演の内容を振り返って記してゆきたい。講演に際しての冒頭には、今回の「鳥のアーキテクチャー」の対象は鳥の身体ではなく、鳥（動物）の作る構造物であるとの案内があった。

はじめに、「巣というアーキテクチャーをもつ生物が鳥だけではなく、たくさん存在する」という説明がなされた。説明の際に用いられた例は、魚類、爬虫類のものであった。前者の巣としては、ブルーギルとペタ、そしてトビウオの例が挙げられた。例えば、トビウオであれば雄が巣をつくり求愛ダンスで雌を誘うという。つまり、トビウオにとって、巣はただ卵を産む場所ではなく、求愛に際しての雄の資源なのである。後者、爬虫類の巣としてはワニの説明があった。土や枯れ草を積み上げて作った巣は、鳥の巣とは似ても似つかぬ形であるが、れっきとした巣である。ワニでは、その巣を利用して、卵が孵化するまで雌が守るといふ。ここまでの説明で、巣を作るのは鳥だけではなく、魚の時代から連続と続くものであるという点が、私にも自然に納得できた。

ところで、「巣とは何だろうか、誤解されがちであるが…」と松原先生は話を進めてゆく。ややもすると私たち人間は鳥の巣を（人間でいう）家に対応すると考えてしまいがちだが、それは正しくないようだ。より正確には、巣の役割は「子のためのベビーベッド」と考えるべきだといふ。

こうして巣の役割が明確になった段階で、つぎに、巣の種類の説明が行われた。巣の種類には皿型（カップ型）、つぼ型（袋状）、ドーム型、樹洞利用、隙間利用などがあり、代表的な鳥の中では、ヒヨドリやメジロは皿型、ウグイスやエナガはつぼ型を利用する。もちろん、同じ型であっても全て一括りにできるのではなく、同じ皿型でも小型の鳥であるメジロは「釣下げ型」のものを作ったり、エナガの巣は「クモの糸、羽毛、コケ」からなったりと、ヴァリエティ豊かであることが示された。

大まかに巣の種類が示された後で、身近な鳥について順序立てて説明が行われていった。そのうちの1つ、ツバメの例をここに記したい。ツバメは泥に藁を加えて巣を作る（これは土壁をつくる工程そのものだ）。かつて遍在した水田の環境はツバメには理想的であったが、現在の街中では泥も藁も足りないうえ、質も異なるため、建物の出っ張りに乗せて巣を作る個体が増えたといふ。

また鳥の巣といえば木の枝など「上」にあるというイメージが強いが、「下」にあるものも多いという指摘がなされた。例えば、ホオジロの巣は高くても地上1mくらい。ヒバリであれば完全に地べたに巣を作る。また、浜辺に産むチドリの卵は、見てもなかなか分から

ない。生きる知恵、というものを考えさせられる。

次に、世界の鳥に目を向けてみると、ずっとユニークな巣を作る鳥が現れてくる。ここでは、複雑に巣材を編みこむメンガタハタオリ、アフリカに生息するシャカイハタオリの2種が説明された。後者は何百羽もの鳥がペアとなり、3m～4m近くある巨大な巣を作り、(鳥類全体では例外的であるが) 1年中巣を利用して生活する。確かに驚かすにはられないような大きさと、参加者からはここで大きな驚嘆の声が上がっていた。シャカイハタオリの巣は、いわば固定資産のような、集合住宅であるという松原先生の表現は実を射ていたように思える。

ここまで「巣」を中心にみてきたが、巣作りと鳥の脳との関係はどうなっているのだろうか。哺乳類と比較しながら松原先生は説明を行った。人類の皺が多い脳と比べた場合、鳥類は皺の少ない「つるつとした」脳をもち、小脳が大きいために複雑な巣を作るという。カマトドリの系統図と巣の形が示されたが、類似の巣を作る種は系統図においても近くにあり、進化の過程で分岐した点が目瞭然だった。

最後に、鳥が巣ではない構築物を作ることが示された。ニワシドリ(アズマヤドリ)はオスがメスを誘惑するために「アリーナ型の東屋」をつくる。同様の目的で、アオアズマヤドリはとにかく青いものを拾ってきて「庭」に敷き詰めようとする。聞いていて、人間であったらどうなのだろう、と考えずにはいられなかった。…意中の異性にアプローチする人間も、そう変わらないような気がする。

一通りの講演を終えた後の質疑応答も非常に活発であったが、特に託卵に関する質問が多かった。身近に存在する鳥であっても、知っていることはなかなか少ない。皆が関心をもつようなテーマで、豊富な例や画像と共に説明してゆくたびに理解が深まってゆく。松原先生の軽快な語り口に引き込まれていった時間であった。

(坂井 景／小石川分館学生ヴォランティア)